

もくぞうぼさつりゅうぞう
木造菩薩立像

平安時代
仲南地区 買田 恵光寺

しょうかんのん
聖観音※¹ であると伝わっています。像

だか
高は、101.0cm です。ひのきざい よせ ぎ づくり
松材の寄木造※²

ちようがん
で彫眼※³ です。平安時代(12世紀初期
～中期)のものと考えられます。

もとり
髻※⁴ は高めに形よく整えられ、丸く短

めんそう
い面相※⁵ に穏やかな目鼻が巧みに刻ま

れています。胸部の柔らかな肉取※⁶ の表

現も優れ、も
裳※⁷ の折返し部分は浅く柔

らかに彫り出されるなど、いかにも平安

時代風で、おんわ
穏和な姿はこの時期の標本
的な作例ともいえます。

もすそ
裳裾※⁸ のあたりは前方からの風にな

びいているような、ちようぎ
軽快さをみせる彫技

は巧みで、両脚の線を感じるように彫り

出しています。

てんえ
天衣※⁹ は、幅広く左右の上膊※¹⁰ を覆

ったあと、それぞれのぜんはく
前膊※¹¹ 内側に至り、

そこで反転して前膊にかかる形をとって



正面より 平成20年6月撮影



右側面より 平成20年6月撮影

おり、極めて珍しい作例です。

上半身から^{だいたい ぶ}大腿部※12に至る部分は
均整^{きんせい}がとれ、腰の張りも豊か^{きやくぶ}で、脚部も
のびのびと表現されるなど、制作技術は
非常に優れています。12世紀初めから
中期にかけての^{みやこふう}都風の作域をもつ像で
あることから、中央（^{みやこ}都、現在の京都方
面）から招かれた仏像であると考えられ
ます。

現在、^{そ ぼく}素木※13の像の印象をうけます
が、背面に残る痕跡から、元は美しい漆^{しつ}
^{ぼく}箔※14像であったものと推測されます。

^{そんめい}尊名※15は、聖観音と伝わっていますが、
腰を左に捻^{ひね}り、右手を膝前^{ひざ}に出している
姿からみて薬師如来※16の脇侍※17であ
る月光菩薩※18であると思われます。

『満濃町史』によれば、まんのう町^{かん}神
野の神野寺※19の旧本尊^{きゅうほんぞん}であったと伝わ
る、と記されています。

『仲南町誌』昭和57(1982)年より抜粋

※1 六観音の一つ。観音といえばこの菩薩の
こと。髻を結び、上半身は裸で腰裳を着けた姿
をしています。色々な変化をした形もあり、区別
するために「聖」がつけられている。

- ※2 木彫りの仏像製作技法の一つ。複数の木
を寄せ合わせて造るもの。平安時代中期に始
まりました。木材の割れを防ぐことができ、その
後大きな像を造ることができるようになりました。
- ※3 木を彫り出すことにより目を表現したもの。
- ※4 髪を頭上に集めて束ねたもの。
- ※5 顔つき。
- ※6 像の製作において肉づきを表現したもの。
- ※7 古代、腰から下に着けた衣服。
- ※8 衣服の裾。
- ※9 菩薩が肩から垂らしている布。
- ※10 上腕。二の腕。
- ※11 前腕の旧称。
- ※12 ももの部分。
- ※13 自然なままで色などを塗らない木。
- ※14 漆を塗った上に^{きんぱく}金箔を貼ったもの。
- ※15 お名前。
- ※16 人々の病を治し、苦しみから救うとされ
る仏。日本では7世紀ごろから医薬の仏として
信仰されてきました。
- ※17 ^{ほんぞん}本尊の周囲に侍する仏像。
- ※18 ^{にっこうぼさつ}日光菩薩とともに薬師如来の脇侍とし
て祀られる菩薩。単独で信仰されることはありません。
- ※19 弘仁12(821)年、空海が創建したとさ
れ、昭和9(1934)年、再建されました。満濃池
の第三次^{かさ}高上げ工事に伴い、昭和30(1955)
年、現在地に^{せんざ}遷座しました。毎年6月の初ゆる
抜き時には、^{ほうすい き がん ご ま}豊水祈願の護摩が焚かれます。



上半身拡大 平成20年6月撮影

